

精神分析と禪清規

鏡 本 光 信

一 禪が歐米人間に注目せられ、禪と心理學特に精神分析の研究が學者間になされ、日本の禪學者の協力等もあり業績も注目せられたが清規の参照は極少で、また政治や經濟と精神分析間の研究業績はあるが、禪と精神分析に政治經濟等を含む研究、特に清規を媒介とするそれは皆無ともいえる。宗教心理學は現實の人間生活と結合し、個人も具體的個人即ち社會的個人を對象とせねばならぬ。ただ抽象的社會に幻惑されぬ要心がある。ユネスコ委員會大學課程の心理學性格づけ所論にも、……(前略) Man is thus seen an individual

whose psychological life is essentially determined with reference to his relations with others. His behaviour is 'social' in origin and in internal structure……(以下略) 1954 とある。精神分析は、廣くは精神現象の觀察分析で心理學の任務そのものであるが、一般には精神の深層の觀察分析と、それに關する心理現象の研究とをいう。私は、政治學に初めて精神分析の方法を導入し、政治の力學構造解明

に業績を示した H・D・ラスウェル氏の「權力と人間」にならつて、精神分析をやや廣義に解する場合も含めた。

二 E・フロム氏は「精神分析と宗教」の著書中、宗教體験の型の分析に、權威・人道の二主義の宗教の重要二區分をして、前者及びその宗教體験の根本要素は、人間を超越する力に對する屈服で、後者はこれに反し人間と人間の力とに集中するといふ。禪と精神分析の共通要素の一は「いかなる權威にも依存しないこと」である。フロム氏は前述書中、至高者に對する非權威主義的態度のよく現れた例として、丹霞禪師の捨捨拾髓を紹介し、鈴木大拙博士も Essays in Zen Buddhism II に紹介してゐる。しかし百丈清規の無佛殿には言及してゐない。禪苑清規百丈規繩頌には「不立佛殿唯構法堂者表佛祖親受當代爲尊也——、入門無佛殿 跏趺有虛堂 卽此傳心印 當知是法王」とある。丹霞天然(七三九—八二四)は石頭希遷の法嗣で清規制定の百丈(七二〇・七四九—八一四)と同時代。隋・唐と大運河に南北が結ばれ、社會經濟上一應

中國のまとまりの體制出來上り時の文化時代、佛教各宗の組織時代と清規制定による叢林制の組織。佛陀時代のガンジス流域の自由・新興の社會經濟時代と江南へと進展する社會經濟時代。六師はじめ多くの思想の自由に咲き亂れた時代と、景教さえ來りて世界的視野も開けている唐文化時代。その人間中心のな面の比較と清規。律と清規、中國民族の實用性現實性と宗教として實踐面を強調する禪の發達等、社會經濟の相似と特色、文化と更に心理の相似と特徴等、廣視野から見た微細視角から、心理分析上重要にして興味あるものが多い。

三 清規の禪淨併習は昭和37年大會で既發表。今は看話默照や頓漸兩悟にも言及しつつ禪苑はじめ多くの清規にある「神超淨域業謝塵勞蓮開上品之華佛授一生記」について概説する。淨域（淨土）を超越という所に禪的悟りの面もあり、蓮開上品之華に觀經上品上生も想起され、經の彈指間往生もあり、瑩山清規は神を身と記している。（發記中には後人加筆の跡あり）聖道門系には己心彌陀、唯心淨土等の語もあり、ここに聖淨思想、禪淨思想の協調和合が見られ、また南宗頓悟系の性格ともよく協調している。禪清規の淨土思想中には、華嚴經系と淨土三部經系との雜居乃至協調和合が見られ般舟三昧經等のそれもある。日本では華嚴宗と淨土宗とは合一して後に分離したことがあるが、經典からの思想の異同と深層心理學的な微細な分析と系統の問題は、重要にして興味ある

研究分野である。看話と默照の悟りの二傾向は、竹中信常博士の明確な分類と例示がある。何れにせよ悟りの時機には期し難いものがある。禪苑清規の百丈規繩類には「除入室請益任學者勤怠或上或下不拘常準——入室參玄理 攝衣請益時 任他勤與怠 上下勿常儀」とある。竹中博士の御研究の上に、更に思想的內容と關連しつつの分析も必要で、思想史的事實の論究に、看黙双方の形態と同時に思想內容的考慮考證を行なわないと、禪の一面を眺めて終る結果になることがある。頓漸兩悟にも形態的と共に哲學的思想內容と心理との微細な分析がなされるべき學術分野がある。

四 百丈清規成立諸理由中、私としての①排佛と遠規、國清百錄。②社會經濟的理由の二を中心として述べるが、今は精神分析學的基礎の概説にとどめる。ただ清規成立理由は諸理由の綜合として理解せられるべきであろう。

三武一宗の難中二武の破佛が既にあるが、特に北魏太武帝の場合は僧團僧侶の墮落等は原因中に大で、唐代に入りても高祖の沙汰太祖の禁令はじめ、百丈規成立近く七一、七二七年の寺院整理等あり、道儒との衝突や國家經濟的事情、僧尼の墮落等は排佛就中破佛の原因で慧遠の遠規制定事情も、將軍桓玄の政權掌握衆僧淘汰（廬山は例外）と共に慧遠が僧團自肅を圖るのが大きい目的である。隋の煬帝の肅正と僧尼墮落等が國清百錄制定に大きい影響あるは當然考えられる。百

丈記制定の中心を流れ主軸をなすものが道心であろうとも、排佛破佛や僧尼の墮落と自肅への要望、遠規や國清百錄の制定等は、意識的にせよ潜在意識的にせよ、影響・理由になつていと考えられる。遠規、國清百錄制定には政治的なものが直接間接に影響しているのは明らかである。

社會經濟的推移が理由としてあげられ、均田法・莊園漸増・江南大開發等がある。均田法は北朝後魏以來、東西魏・北齊・後周及び隋の均田法、更に從來を整備した唐均田法がある。唐のは道士、僧に三十畝、女冠、尼に二十畝、租庸調は此等は負擔せず。中唐以後特に安、史の亂後均田制の崩壞増進し、徳宗建中二年（七八〇）兩税法になり宋代も兩税法。莊園は別莊の意だつたが中唐以後私有大土地の稱となり、兩税法では納税した。四五祖以來の大集團化は唐均田法時代で、僧口分田所有と六祖の如き磨頭相當の役目等から農耕も考えられ、百丈は慧能の禪風を好み慕つたから、此等は清規内容や制定に影響したと考えられる。兩班が律令の官制の如き中國民族的左右相稱の役職から推しても、唐律令や均田制の影響が偲ばれる。莊園漸増は前述したが、勅修百丈清規には「古規初無莊主監收」とあり、禪苑には「莊主之職主官二稅」とあり、この間の事情を物語る様である。宋代には大土地所有が發達し、それは開墾、新田建設も影響したが、多くの莊園を持つ寺院もふえ元代の勅規には「諸莊監收」とある。

楊子江流域は三國時代に蜀（上流）吳（下流）の獨立政權が生れ得て、隋唐は大運河により首都と結ぶ時代で、中唐、宋へと江南大開發時代に百丈清規は成立した。社會經濟と清規に關して大野信三經濟學博士は「……とくに消費生活の徹底した合宜化するわち合理化の綱領を意味し、經濟的にもひじょうに重大な意味をもつ要素になつた」と消費經濟面につき述べておられるが、生産經濟面にも作務の精神や園頭、莊主の職や心得、「一日不作一日不喰」等、江南大開發時成立の清規は、經濟的にも重大な意味をもつ要素を有する。消費生活合理化面の根本思想は道心であり、特に功德の思想で、永平清規には「功德海中一滴也莫讓」「雖小因感大果唯三寶之福田而已」「護惜之如眼睛」等々あり、禪苑には瀘水法（律や諸經論、國情百錄にも）等もある。

五 清規には禪苑はじめ受戒護戒や授戒儀式次第等を記すものが多い。シュライエルマツヘルも「徳は力なり」としているが、受戒時に持戒者が得る恒存的勢力を「戒體」と稱し防非止惡の作用をなすとせられる。戒體論に關して無作や無表、無表業等々の深層心理に關係ある語が出てくる。禪家には禪戒一致の思想があるが受戒を重視する。戒と倫理は關係が深い、フロム氏は「精神分析的概念では貧欲は病的現象」でそれは「人がその能動的生産的能力を十分發揮しなかつたところに存在する」という。

禪も精神分析もその目的を達成することは「倫理的變化を伴い貪欲を克服し、愛と慈悲の能力をもたらす」（禪と精神分析所載）と考えていることで、鈴木大拙博士も禪に生きることは、「自分自身及び世界を最も大事にする敬虔な心の枠の中で取り扱うことを意味する」即ち「禪的訓練の最も特色ある面である陰徳の基礎となる態度で生きることである。それは自然の資源を無駄にしないこと、それはあなたの出會うありとあらゆるものを經濟的にも道德的にも全幅的に活用することを意味する」（Introduction to Zen Buddhism 所載）と述べるが、これらの思想は多くの清規を貫く精神であり、それらあらわす文章は清規の多くの箇所から拾い得る。

- 1 竹中信常著宗教心理の研究各論一の七直観と靈感
- 2 大野信三著佛教社會、經濟學說の研究三四五頁
- 3 道元の正法眼藏受戒には禪苑清規をや、長く引用した後「……戒律爲先の言、すでにまさしく正法眼藏なり。……正法眼藏を正傳する祖師、かならず佛戒を受持するなり……」とある。永平清規にも梵網經を「須看」と強調してあるがその序に、「戒如摩尼珠 兩物濟貧窮 離世速成佛 唯此法爲最」とあり、本文（梵網經盧舍那佛說菩薩心地法門品第十）には、「……衆生受佛戒 卽入諸佛位 位同大覺已 眞是諸佛子……」とある。

新刊紹介（3）

中村 元編 「自我と無我」

——インド思想と佛教の根本問題——

序論 インド思想一般から見た無我思想 中村 元

第一部 インド思想一般における問題 高崎直道

古ウパニシャッドのアートマン観 雲井昭善

宿命論・無因論と佛教の批判 宇野 惇

ジャイナ教の我論 山口惠照

サーンキヤ體系におけるブルシャの概念 宮坂宥勝

ニヤーヤ學派におけるアートマンの問題 原 實

バガヴァッド・ギーターにおけるアートマンの概念 瓜生津隆眞

イーシュヴァラ・ギーターにおけるアートマンの概念 原 實

第二部 佛教における問題 瓜生津隆眞

無我と主體 ——自我の緣起的理解、 原始佛教を中心として

ミリンダパンハーにおける我と無私の論點 平川 彰

俱舍論における我論 破我品の所説 櫻 部 建

中論における無私の論理 第十八章の研究 梶山雄一

眞理綱要における我論批判——ミーマンサー、 服部正明

サーンキヤの想定する私の考察—— 勝呂信靜

唯識思想よりみたる我論 第三部 西洋哲學における自我思想とアートマン

思想との比較 古代より中世へ 川田熊太郎

近世哲學とアートマン思想 玉城康四郎

私の問題に關する研究文獻 A5 本文七一頁 文獻目錄六六頁 索引三二頁

平樂寺書店刊 定價 三、〇〇〇圓